千年咲く花（仮）

検討稿

作　大岡俊彦

劇場用映画オリジナル脚本
（ラブストーリー／タイムスリップを絡
めたせつないテイスト）

登場人物

風間　千恵（３８）
花が好きで、陶器が好きで、カエルグッズが好き。
整理整頓は下手なかわりに、目当ての物を一発で見つける。
独特の感性とことばを持ち、「捨てられるいのち」に敏感。かわいいものや元気の出るものを集めるのは、孤独の裏返しである。
司郎の妻。

風間　司郎（３５）
千恵の夫。テレビドラマ系ディレクター。面白い冗談で茶化すのが仕事のような男。千恵とは、長年コンビを組んできたかのような会話を楽しんでいる。
謎の奇病「脳だけ未来にタイムスリップ」になってしまう。

北村　和宏（３６）
司郎の大学の同期で、北村医院院長。テレビにひっぱりだこの半分タレント。脳外科医。
口だけで中身のない男。ＩＱの高い嘘つき。自分が中身がないと言われるのを恐れている。

折田　弓美（３５）
京都の小劇場の舞台女優。
生真面目な人見知り。

黒木（４５）黒い人脈の人。北村に高額を貸している。

村井（３０）北村医院のエース。外科医。
藤岡（３５）弓美のパートナー。劇団主宰。
梨花（２１）学生。藤岡の劇団所属の女優。

○五月、新緑あふれる街路樹の道

街路樹からあふれる陽光。
新緑のトンネルを走る、引っ越しトラック。
ここは、古くからの高級邸宅街Ｄ。
窓をあけ、助手席から眺める夫婦、風間千恵（３３）、司郎（３０）。

千恵　「庭が凝ってるーーーーー！」
司郎　「いっこいっこの敷地がでけえよ！」
街路樹に並ぶ個性的な屋敷たち。
生垣の隙間からのぞける庭は、色とりどりの凝った花にあふれている。
と、ゴミ置き場に、古い家具にまじって、花の終わった胡蝶蘭が捨ててある。

千恵　「（蘭に）あとで助けに来るね」

○二人のアパート、前

時代に取り残されたような、味のあるアパート。トラックから運ばれる荷物。

○二人の部屋

広い窓から差し込む強い光。
古い畳の、六畳ふたま。
荷物の山を眺める司郎。
窓を開けて、風をたのしむ千恵。

千恵　「昔の家だから畳が大きいね、しーちゃん。柔道できるよここ」
司郎　「うりゃ（と柔道組みを）」
千恵　「とりゃ！（と受ける）」
押し入れの関係で間取りが余ったのか、半畳の板間が。

司郎　「なにここ？」
千恵　「踊り場、的な？」
司郎　「よしちー坊、これを踊り場と名づけよう。今後いいことがあったときは、二人でここで踊るのだ」
司郎はへんてこな踊り。

千恵も呼応して変な踊りを。
千恵　「ヘイヘイ！　ここはちー坊としー
　ちゃんの踊り場（笑）」
×　　×　　×
つぎはぎした再利用の、ボロボロの段
ボールを開ける千恵。
千恵　「暗かったでしょ植物さんたち」
中から沢山の植物を出して、窓際に並
べ始める。
一方、司郎はテレビを設置中。
司郎　「ここでいい？」
千恵　「しーちゃんはテレビのお仕事なんだ
　から、大明神のように真ん中に」
司郎　「しかし端っことはいえ、田園調布の
　住民とはねえ」
千恵　「京都の貧乏学生の私たちに、タイム
　マシンで言いに行っても信じないよね」
司郎　「（窓際をさし）ちょっと！　そこ俺
　の机の予定地！」
千恵　「何のために、窓の広い部屋にしたの
　よう」
古い陶器を再利用した鉢が窓際を占領。
籐籠のハンギングが広い窓を占領。
（どれもまだ花のない、緑一色）
千恵　「花から元気をもらえる部屋にしたい
　の。あ、そうだ。お茶いれるね。んー…」
と迷いなく段ボールのひとつをあける。
中からセーターにくるまれた陶器、カ
エルグッズ、本、瓶詰めの飴が出て、
最後に紅茶セットが出てくる。
司郎　「なんで毎度一発でわかるの？」
千恵　「声を聞くの。『見つけてくださ
　い』って。それを引くだけ」
司郎　「聞こえないよ」
千恵　「しーちゃんにはじめて会った時も聞
　こえたよ？　運命の声を、聞く力」
別の段ボールを指す。司郎があけると、
古い味のある陶器が続々と。
司郎　「割れたら終わりの物ばっか…」
使い込んだペアのマグカップを出すが、

手が滑って一個落として割ってしまう。
司郎　「ああ！　ごめん！　あー…」
千恵　「そのへん踏んじゃダメ」
素早く千恵はガムテを出し、小さい破片をぺたぺたと。
司郎　「…ごめん」
千恵　「京都の…これは下鴨バザーで買ったやつ。まだしーちゃんが私の下宿に通うとき以来のペアカップ」
破片を組み合わせようとする司郎。
千恵　「…割れるものだから、大事にするんだよ」

○夕方、街路樹の道、ゴミ置き場の前

スーパーの袋を抱えた千恵、捨てられた蘭の前で立ち止まる。蘭に挨拶。

○夕方、二人の部屋

ボンドで貼り合わせたマグカップ。
植物においやられたような窓際の机で、司郎は台本を広げ、カット割りの絵を描いては消している。
千恵の帰宅に、集中してて気づかない。
机の上のランプが、司郎の横顔をたまたまかっこよく見せている。
千恵　「…ちょっとライティングがカッコイイぞ」
司郎　「（千恵に気づき、マグを見せる）これ多分もれる」
千恵　「もれる方が通気がいいし」
と、葉っぱだけの蘭をそのマグに植え替える。
司郎　「もしもしそれは何ぞ」
千恵　「花しか見ない金持ちが、終わったからって捨ててるの！　まだ生きてるのに！　胡蝶蘭は千年生きるのよ？　こまめに世話すれば、毎年毎年咲けるチャンスがあるのに！」

司郎　「…」
千恵　「ウチに来ていいですか？」
司郎　「（沢山の植物を見て、ため息）いっこ増えたって変わんないけど」
　　千恵は嬉しくなり、蘭とマグをなでながら、窓際の真ん中に置く。
千恵　「新しい生き方をしようね」

○タイトルイメージ、二人の部屋

　窓に吊られた緑一面の植物たち。
　なにもなかった部屋に、家具や小物が、
　新しい蘭の株が増えていく。
　マグ入りの蘭から小さな花芽がのびる。
　可憐なピンクの花が、二輪咲く。
タイトル「千年咲く花」
　（以降、ラストまで花は咲かない）

○５年後、二人の部屋

　木やガラスや布など、手触り重視のモノにあふれている。
　窓一面の、葉ばかりの蘭に水やりする千恵（３８）。と、ケータイが鳴る。
千恵　「しーちゃんまた私起こさずに会社いっちゃったでしょ。起きた時一人はさみしいよ。御主人様に捨てられた捨て犬の気分だよ。…ホント？　今日お仕事ないの？…ランチアンド映画なんてひさしぶり！」

○Ｄの隣町、Ｊ丘駅前広場

　Ｊ丘マダムの押すベビーカーの赤ちゃんが、じっと千恵を見つめている。
　笑って手を振り返す千恵。
　改札を出ると、ロータリー広場にはオシャレで幸せそうな人々の午後。
　無料ティッシュ、フリーマガジンを受け取った千恵。
千恵　「引いた！」

『人気脳外科医キタムラがススめる！
脳にイイ！街特集』の表紙は、メガネで院長姿の北村（３６）が満面の笑顔。小さい柱に座って待っている司郎（３５）を見つけると、背後から尻を強引に押し込んで、二人座りに。
司郎　「なにすんねんデブ（笑）」
千恵、笑って雑誌を見せる。
司郎　「おう北村。出世したなあ。バラエティで随分のし上がったな」
千恵　「ほんと最近テレビよく出るよね」
司郎　「本業やってねえだろ絶対。相変わらずメガネの奥は笑ってねえし」
と、ケータイが鳴る。司郎立つ。
司郎　「（冗談で）ハイ来々軒。ラーメンみっつ。……え？　嘘！　今日！？　今日１３日でしょ？」
千恵　「（ため息をついて首を振る）」
スケジュール帳を慌てて開く司郎。
司郎　「…３日間違えた。３０分で行く」
千恵　「またうっかり『あっ』ですか」
ケータイを切る司郎。
千恵　「ぶー」
司郎　「ゴメン。ごはん一人で食べて」
千恵　「…『藤原俊成の女（むすめ）』とか『菅原道綱の母』みたいに、私が歴史に残る名前は『風間司郎の妻』ですか。私は司郎に仕えるだけの一生ですか。私の名前は千恵です。『妻』じゃないんです」
司郎　「…いかなきゃ」
千恵　「（立つ）しーちゃんばっか出世してずるいよ！　しーちゃんは私たちのこと考えてるの？　このまま子供もつくらず生きてくの？」
司郎　「それ今言わなくても」
千恵　「じゃいつ言えばいいのよ！　えっちしてって！　ねえ、花は何のために咲くの！？」
司郎　「…（駅の時計を見る）」
千恵　「（我慢する）…行ってらっしゃい。

お仕事がんばってください」
一人取り残される千恵。
ベビーカーのマダム達が通る。

○司郎の会社（小さな制作プロダクション）

デスク女子「風間さん精算書まだですか？」
司郎　「出したじゃん３日前」
デスク女子「…いいえ」
司郎　「…？　出したよ３日前」

○司郎の会社、会議室、深夜

打ち合わせ中も首をひねる司郎。

○深夜４時半、二人の部屋

机の上にカエルグッズを並べ、お祈りする千恵。
千恵　「もう贅沢は言いません。うっかりしーちゃんが『あっ』とか言って事故にあってませんように。無事にカエルおまじない」
そこへ帰宅する司郎。
司郎　「（疲労しきって）ただいま…」
千恵　「よかった無事で。しーちゃんあのね」
司郎　「（畳に倒れこむ）寝さして。…起きて待ってなくてもいいのに」
千恵　「だって起きてるしーちゃんに会いたいもん。お仕事大丈夫だった？」
司郎　「なんか変だよ。アレ３日くらい前にやった打ち合わせだよ。なんでもう一回やるんだよ。…寝ていいすか」

○その直後、朝６時半、二人の寝室

ケータイが鳴り、二人飛び起きる。
千恵　「わっ！　しーちゃん電話！」

○撮影現場、以下寝室とカットバック

プロデューサー「監督が現場すっぽかしってどういう事だ？！」
スタッフ以下全員スタンバイ中。
司郎　「はあ？　えええ、何の」
プロデューサー「君は工事現場の監督か？」
司郎　「？　撮影は３日前にやったじゃん」
プロデューサー「…いまどこ！」

○翌日、街路樹の道

司郎と千恵、緑の道を歩きながら。
司郎　「だってたしかに３日前に撮影はしたよ。ヨーイスタート、ハイオッケー。なんで同じことやんだよ」
千恵　「…デジャヴ？」
司郎　「うん。…仕事デジャヴ」

○Ｊ丘、パスタ屋

司郎　「むっ、このパスタ３日前に食べたデジャヴが」
千恵　「前世の恋人が今世で会えたとか、はじめて行った場所なのに涙が止まらなくて、それは前世で住んでた町、とか、そういうのにデジャヴは使おうよう」

○Ｊ丘、電器屋の街頭テレビの前

千恵　「あああしーちゃんごめんなさいいい。あれは未来の私が警告に来てるんですううう。もうやけ食いはしませんんんん」
千恵と同じ背格好の、太い女性が。髪形やゆるめの服など、地味な雰囲気が千恵とかぶっている。
司郎　「（笑）未来のちー坊よく会うよね」
千恵　「それはいくつもの分岐する未来から、ことごとく今の私に警告を…」
街頭テレビの前で司郎が立ち止まる。

工場火災のニュース。火の手のあがる現場で、レポーターがしゃべっている。
司郎　「コレびっくりしたよね。いきなりドンって来たもんね」
千恵　「なにが？」
司郎　「爆発。ホラこのコのスカート、パンツ見えそうでさ…」
　その瞬間、ドン、と爆発事故が。
千恵　「ひっ」
　現場は騒然。爆風でレポーターのスカートがめくれそうに。
司郎　「あーやっぱ見えないや」
千恵　「…」
司郎　「？」
千恵　「しーちゃん、何でわかったの？」
司郎　「これ３日くらい前の録画でしょ？」
千恵　「ちがうよ！　どうして分ったの！」
　画面には『ＬＩＶＥ』の文字。
　炎上の騒ぎがおさまらない現場。
千恵　「しーちゃんてさ…まさか、本当に３日先の未来からきた人？」

○心療内科

○同、廊下

司郎　「どうせここもヤブだよ」
千恵　「いいから一応」
　司郎を診察室に押し込む千恵。
　待合席に座る。かばんからフリーマガジンを出し、何気なくめくる。

○同、外の駐車場

　背伸びして出てきた千恵。
　赤いオープンのベンツに乗った男が、ケータイで電話しながら駐車しようと。
男　「その分は、ウチのエースにやらせますよ。大丈夫っす！　あ、今度本出すんです。ええ、ええ。印税で補填しますよ！」

ケータイの着信音。
助手席シートには何台ものケータイが。
男　「（もう一台に出て）あ、もう駐車場ですよ？」
立っている千恵をかわして車を駐車場に入れるが、死角にあったプランターをひっくり返す。その衝撃に気づき、
男　「やべ！　轢いた？（と、千恵に）」
千恵　「いいえ大丈夫です。…あ、引いた」
男　「轢いた？」
千恵　「北村さん」
男（北村）「え？　…あれ、黒川さん！？」
千恵　「相変わらず、引き、強いわ私」
手に持つ雑誌の表紙は北村。
北村は、表紙と同じ笑顔をする。

○後日、二人の部屋

壁の日めくりはタテに裂かれ、左半分だけ三日先を示している。
北村　「風間は昔からの親友だし、協力はしたいよ。デジャヴのひどいやつは…」
千恵　「記憶障害や、統合失調症の前兆かも、というところまでは調べた」
手元の複数のカルテを見る北村。
北村　「どのセンセイも、疲れによる一時的な記憶の混乱では、と」
千恵　「いっつも睡眠不足の仕事だし、ぐっすり寝れば治るかも。病気なら、だけど」
千恵は、カエルとウサギの小さい人形を机の上に出して説明する。
千恵　「私がコレ（ウサギ）で、司郎がコレ（カエル）だとする。私たちは、日々仲良く暮らしていました」
ふたつを並べて歩かせる。
千恵　「ところが」
と、カエルの頭をぽきゅっと外し、頭だけを3歩先に、トントントンと。
千恵　「カエルさんの脳だけが、3日先にタイムスリップしてしまったのです」

北村　「…」
千恵　「（頭を振り向かせて）彼から見れば、今の私たちは３日前の私たち。『３日前にそれは見た』と言う彼と辻褄があう」
北村　「…また飛びすぎな」
　手帳の走り書きのメモを見せる千恵。
　『０４の１３２５２５』。
　テレビをつける。宝くじの抽せん会の生中継。
北村　「…オイオイ」

○回想、Ｊ丘、宝くじ売り場前

司郎　「ちょっと待って。０４…１３…メモして！」
千恵　「は？（とりあえず手帳を出す）」
司郎　「０４の、１３…２５２５」
千恵　「（メモしながら）オー４つのひとみがニッコニコ、と」
司郎　「それだ。その語呂合せで覚えてた」
　二人は列にならぶ。
二人　「…あっ（同時に気づく）」

○（元に戻り）二人の部屋

千恵　「宝くじって好きな番号買うシステムじゃないから。でも…」
　テレビ中継。ドラムロール。
　一斉に矢が放たれ、一等が決まる。
アナウンサー「一等３億円は、０４組の…」
千恵　「オー４つのひとみが…」
アナウンサー「１３…」
千恵　「ニッコ…」
アナウンサー「２５…」
千恵、アナウンサー「ニコ」「２５！」
北村　「…どういうことだよ！」
　３歩先に進んだカエルの頭。
千恵　「…『３日先病』って病気、あるの？本当に、タイムスリップ？」
北村　「…ウチの病院なら、最新の機材があ

る。精密検査を」
と、ふすまがあく。寝起きの司郎だ。
司郎　「あーよく寝たよちー坊。アレ？　おう北村」
北村　「おう。…大学の研究室以来か」
司郎　「ある日ウチのクラスの下宿全員に、裏ビデオのカタログが配達された事件あったな。アレ、名簿売った犯人お前だろ」
北村　「随分な挨拶だな（笑）　…お前にとっては、3日前にした挨拶か」
司郎　「？　（指折り数えて）4日前だろ」
千恵　「4日、前？」
思わずカエルをもう1歩進める千恵。

○ＣＴ検査室に入れられる司郎

○北村医院、診察室

脳の断層写真を前に、千恵と司郎に、専門医の村井（３０）が説明。
北村が入ってくる。
北村　「5日先になったって？」
千恵　「ぐっすり寝かせたら、更に一日先になってた」
北村　「…ウチのエースの見立ては」
村井　「側頭葉のレセプター異常もないし、器質的にも、いわゆる正常の範囲かと」
司郎　「俺さまの異常な天才性が脳に出てないだとう？」
村井　「（ＣＴ写真を指し）この中身が現在か未来かは写真じゃわかりません。肉体は現在で、意識や記憶だけが未来、という特殊な状態としか」
北村　「…」
司郎　「だから俺は今、過去にいるんだよ」
千恵　「…予言者とか、こうやって未来とつながってるのかな」
×　×　×
北村は机の上に、雑誌、スポーツ新聞、競馬新聞、株価一覧などを広げる。

司郎　「いちいち気にして生きてねえし！」
北村　「じゃあなんで宝くじ覚えてた？」
千恵　「あれは語呂合せだったから」
　新聞をめくる司郎の手が止まる。
司郎　「この会社不祥事おこして、ハゲ一列で頭下げたのいつだっけ？」
北村　「（メモを取る）まだだ！」
司郎　「阪神は相変わらず負け…これは２ＲＫＯ…あと、この映画はこける」
千恵　「（横からのぞいて）それは私でも分るよ。宣伝がキャストだけだもん。面白い映画なら、ストーリーを宣伝するもの」
北村　「…（考えて）雨は、降ってるか？」
司郎　「きょうは土砂降りだね」
千恵　「？　…なに言ってんのしーちゃん」
　窓の外はいい天気だ。
北村　「来た！　世の中には、明日の天気が分るだけで儲かる世界もあるんだ。…ここ５日分の天気覚えてるか？」

○５日後、北村医院院長室、外は土砂降り

　テレビでは記者会見、スポーツ新聞は２ＲＫＯ、新聞は『開会式荒天中止』。ケータイ片手に爆笑する北村。
北村　「はっははっはっ！　笑いが止まらんでしょう！？　予言者さまさまですよ！」
×　×　×
　雑誌を指差す司郎、北村は分厚い封筒を千恵に渡す。中の現金に驚く千恵。
×　×　×
　雨の日。同じく分厚い封筒を。
　晴れの日。同じく分厚い封筒を。
×　×　×
北村　「（窓の外の雨を見て）…大損だ」
千恵　「…多分、またずれた。（司郎に）今日何曜日？」
司郎　「月曜」
千恵　「一週間先。…二週間かも」

○二人の部屋

に監視カメラを取り付ける業者たち。

北村　「あるいは何かの専門家なら、記録から何か発見できるかも知れん」

先に進んだ、机の上のカエルの頭。

周りに、花の切り抜き写真が、歳時記のようにセロテープで貼ってある。

千恵　「駅前の、高島屋の包装紙みたいな薔薇は咲いたって。セブンイレブンの隣のエンゼルトランペットは不明、羽衣ジャスミンのあまーい香りがまだと考えると、二週間から二カ月先の間。（司郎に）あの黄色薔薇屋敷のクレマチスや梅の実は？」

司郎　「いちいち男が花の名前なんか覚えてねえよ」

千恵　「…あれだけ毎回教えたのにー」

○二人の部屋、雨

部屋干ししている千恵。

ひとつのハンガーに、司郎と千恵のパンツがペアで干してある。

司郎　「なにそれ？」

千恵　「二人のえっちがはやく来ますように、というちーちゃん独自のおまじない」

司郎　「呪い干し（笑）」

千恵、窓際の司郎の隣に座る。

千恵　「司郎の今日は、晴れてる？」

司郎　「晴れてる」

二人のアップを交互に。千恵の背景は雨。逆に、司郎の背景は晴れ。

千恵　「強いストレスやトラウマなんかが、心の奥底に影響を与えるっていうじゃない？　しーちゃんは、どうして私から遠ざかっていくの？　しーちゃんは私が嫌い？　ケンカしたから、しーちゃんは逃げてるの？　逃げて私を捨てるの？」

司郎　「…そんな訳ないじゃん」

と、千恵の手を握る。司郎の手は晴れ、

千恵の手は雨。
千恵　「しーちゃんはここにいるのに、ここにいない（涙をぽろぽろと）」
司郎　「大丈夫。地球は滅亡してないし、大地震も起こってない。大丈夫」
　　机の上の、ウサギとカエルの頭（後姿）。ウサギが追いかけているようにも見える。その先に、テーブルの端が。
千恵　「あの頭がどんどん先に行って、テーブルから落ちたらどうなるの？　脳死？」
司郎　「…寿命まで先にいったら、そうなるのかね」
千恵　「早く帰って来てよ。カエルは『無事カエル』のお守りなんだよ？」
司郎　「大昔約束したよね。ちー坊より先に死なないって」
　　司郎はやさしく千恵にキスをする。
　　司郎側は晴れ、千恵側は雨。
司郎　「時空をこえたキッス（笑）」
千恵　「…この『時をかける中年』（笑）」

○深夜、二人の部屋、台所

　　眠れないのか、司郎が起きてきて、冷蔵庫からペットボトルを出し（ペアの残りの）マグカップにそそぐ。
　　千恵も起きてくる。
　　司郎は異常に驚き、カップを落として割ってしまう。
司郎　「ちー坊ーーーーーーーーーッ！！」
千恵　「え？」
　　はげしく千恵を抱きしめる司郎。号泣。
司郎　「ちー坊！　ちー坊！　ちー坊！」
千恵　「どうしたのよ。なに？」
司郎　「よかった！！　生きてたあああ！」
　　そのテンションは尋常でない。
千恵　「…ちょっと、落ち着いてよ。私はいるよ？」
司郎　「辛かったよう。病院にずっと泊まりこんで、ちー坊結局一度も目覚めなくて、

夜中雨降って嫌な予感がして、看護婦さん呼びにいって…」
千恵　「どうしたの？　大丈夫。大丈夫」
司郎　「死亡届って文字見たら、立ってられなくて…」
千恵　「しーちゃん？　まさか…まさかだけど、…私は…」
司郎　「ダメ！　それ言わないで！　言っちゃダメ！　気づいたら消えちゃう！」
千恵　「私は、……死んだの？」
司郎　「あああああああああああああ！」
　　喘息のような、過呼吸のような症状。
　　慌てて背中をさする千恵。
司郎　「……」
　　司郎の呼吸が、落ち着いてきた。
　　床に散らばった粉々のマグカップ。
司郎　「…わかった。これは、夢なんだね」
千恵　「（手を握ったまま）…？」
司郎　「だって、そうだよ。俺は今、夢の中で、…死んだ、ちー坊と会ってるんだ」
千恵　「夢？」
司郎　「そっちはさみしくない？　めしは食べてる？　幽霊はダイエット気にしなくていいんだよ？　かゆみどめとか、小腹すいた時のおやつとか、暑い時の扇子とか、足首冷やさない用のバンダナとか、棺には入れといたから」
千恵　「しーちゃん」
司郎　「そうだ！　踊り場で踊ろうよ！」
　　と、手を引いて立つ。
司郎　「一度も、あそこであれから踊ってないじゃん結局。いいことがあった時は踊ろうって決めたのに！」

○同、二人の寝室の半畳の板間

　　不器用な社交ダンスを踊る二人。
司郎　「もう一度ちー坊と踊ることが出来るなんて、夢のようだよ。あ、夢かこれ」
千恵　「しーちゃん、今いつにいるの？

しーちゃんはどこにいるの？」
司郎　「ちー坊。…ちー坊」
　司郎は千恵を強く抱きしめる。
千恵　「しーちゃん、帰って来て。帰って来て。…元に戻りたい」
　月明かりの、たった半畳の板間。
　裸足のチークダンスは、板間を踏む音だけが伴奏である。

○翌日、二人の部屋

　昨日の録画を、一時停止する千恵。
北村　「…」
　机の上の、カエルの胴体とウサギ。
　そのはるか先のカエルの頭。
　千恵は、ウサギをもう一体出して、頭の隣に置き、パタンと倒す。
千恵　「…私は、そのいつか、死ぬの。…病院で、雨の降る日に」
北村　「馬鹿な。未来が決まってる、とでも言うのか！？」
千恵　「…でも、司郎の予言は全部当たったよね？」
　紅茶にミルクを入れる千恵。ミルクが描く渦を見つめる。
北村　「そのミルクの混ざる模様は、正確には予測できない、と考えるのが現代の科学だ。第一未来が全部決まってたら、人間の努力はなんなんだよ」
千恵　「人の出会いや生き死には、理屈じゃないでしょう？　私は司郎と出会ったとき、運命を感じたよ？」
北村　「じゃあ君が死ぬ運命を君は受け入れるのか？」
千恵　「…」
北村　「…状況を整理しよう。やつは一日起きてから寝るまで、意識はちゃんと連続してて、それは一日だと認識してる」
千恵　「そう」
北村　「寝て起きたら次の日になってるか、

何日か飛んで更に未来の日として起きている」
千恵　「…ええ」
北村　「つまり加速は、寝てる間におきると。…ずっと徹夜してたら？」
千恵　「朝まで起きてたときは、ちゃんとその一日だった」
北村　「睡眠が、なんらかのカギかも。睡眠の間に、記憶が整理されるというが。…記憶や意識がどういう形なのかすら分かっていないんだ。…学会関係、外国の症例…似たものがないか、俺のネットワークで探してみる。…あいつは？」
千恵　「（ふすまの奥を見て）まだ寝てる」

○二人の部屋の隣、寝室（昼〜夕〜夜〜朝）

布団の中で、目をさます司郎。
司郎　「…おはようちー坊」
隣に寝ている千恵の位置に手をのばし、頬に触れようとする。
だが目線の先には、千恵の遺影。
骨壷と祭壇。
司郎　「…」
起き上がり、窓を開ける。
ふすまを開ける。（前シーンまで北村と千恵がいた）部屋には誰もいない。
一人部屋の隅で座り、千恵の遺影を見つめる。
夕方になり、夜になる。
電気もつけず司郎は動かない。
夜明けを迎える部屋。
司郎は動かない。

○寝室〜二人の部屋

布団の中で、目をさます司郎。
（遺影のあった）目線の先は、千恵の布団がたたんである。
司郎　「…ん？」

起きたときに、今現実なのか夢なのか
わからない感覚。
ふすまの向うから話し声が。
北村の声「あいつは？」
千恵の声「まだ寝てる」
起き上がり、ふすまを開ける司郎。
千恵と北村（2シーン前の）がいる。
司郎　「ちー坊！　生きてたのか！」
千恵　「…？」
司郎　「…いや、これは夢だな？　ちー坊が
ほんとは死んでるって気づいたら、この夢
は消えちゃうんだな？」
千恵　「ちがうよしーちゃん、ここは現実！
私は死んでない！」
司郎　「夢だよ。…ちー坊が生きてるわけな
いもの。おう北村。なにしにきた？」
千恵　「…」
北村　「（立つ）今日の所は戻るよ」
×　×　×
前のシーンと同じ、部屋の隅に座る司
郎。その隣に座る千恵。
司郎　「膝枕して？」
膝枕する千恵。甘える司郎。
千恵　「どうしたのそんな甘えて」
司郎　「やわらかくない膝枕。ちー坊の膝枕
は、下半身デブで、固くて、首が痛くなる
膝枕」
千恵　「なにいってんのムカツク」
司郎　「それがいいんだ」
千恵　「…」
部屋の隅のラタンのタンスを見て、
千恵　「そこに、二人しかわからないものを
入れて封印するから、私のいない現実で開
けてみて」
司郎　「なんで？」
千恵　「未来通信」
司郎　「…わかった（膝枕に甘える）」
千恵　「…しーちゃん。ごはんとか、ちゃん
と食べてる？」
司郎　「いつもの店とかは行くよ。こないだ

何名様ですかって言われて（指二本出して）、あ、違うんだって。…注文頼みすぎちゃってさ、一人で食べる量って少ないんだね」
千恵　「お仕事は？」
司郎　「しばらく休んでる。起きて、ごはん食べて、見ようって約束した映画見て、銭湯行って『ビバ風呂！』って言ったりしてる」
千恵　「じゃ毎日、なにしてるの？」
司郎　「ずっと、…じっと生きてる」
　　その孤独な瞳を見て、言葉を失う千恵。
　　窓一面の蘭を見て、起き上がる司郎。
司郎　「あ、蘭はちゃんと水やりしてるよ。見よう見まねだけど。ていうかどれが何蘭か分んねえよ。ていうか多すぎだよ」
千恵　「本があるからそれを見て。素人の水やりはやりすぎて根腐れさせるし、胡蝶蘭は上級者向けだし」
司郎　「冬の東京はカイロ並に乾燥するから空中湿度、でしょ。ちー坊の口癖はおぼえてるよ」
千恵　「うん」
司郎　「もっと花の名前とか、覚えときゃよかった。ちー坊がどうして花を大事にしてたか、おれ正直どうでもよかったんだ」
千恵　「ひどい。どれがどこで買ったり拾ったりしたか、私は全部覚えてるのに」
司郎　「でもさ、新しく葉っぱが出てきたり、根が出ると分る。いのちなんだ。割れるから大事にする、って言ってた意味が今なら分る。いのちを君は残したんだ」
千恵　「うん。…ね、蘭に寿命がないって話は知ってた？」
司郎　「嘘！　命でしょ！？　あるでしょ寿命」
千恵　「ソメイヨシノとかは１２０年って言われてるけど、植物の研究って進んでないの。胡蝶蘭は、条件さえ整えば、葉が出て、下の方から枯れて、が永遠に続く、って言

われてる。千年生きる、私たちとは別の形のいのち」
司郎　「誰も永遠なんて見たことないだろ（笑）」
千恵　「永遠の愛を見たことのある人だっていないよ？（笑）」
司郎　「いちいち水とか温度とか、めんどくさい」
千恵　「その手間暇が、愛情と同じなの」
司郎　「…わかった」
千恵　「…ねえ」
司郎　「…？」
千恵　「私はどうやって死んだの？」
司郎、首を振って心を閉ざす。
インサート。朝焼けの部屋で、首を振り続ける司郎。
千恵　「しーちゃんごめん。しーちゃん」
千恵は司郎を抱きしめる。

○翌日、街路樹の道

独自の歌を歌う司郎。
司郎　「ランチ、アンド、映画！」
千恵　「（合いの手）リベンジ！」
司郎　「ランチ、アンド、映画！」
千恵　「こないだのリベンジ！」
司郎　「夢の中で、デートだひゃっほう！」
と、ゴミ置き場に、また花の終わった、葉っぱだけの胡蝶蘭が捨ててある。
葉の状態をチェックする千恵。
司郎　「レスキューしなよ」
千恵　「いいの？」
司郎　「無駄に捨てられる命なんて、ない」
千恵は大切そうに鉢を拾う。

○J丘、パスタ屋

壁にかかる、どこかの砂漠の写真。
司郎　「またいつか、鳥取砂丘行けるかな」
千恵　「え？　行ったの鳥取砂丘！　ずる

いよ一人で！」
司郎　「一緒にいったじゃん。四十九日までは魂がその辺をフラフラしてるから、て坊さんに言われて、あわててちー坊の写真持って。いたよね？　ちー坊の魂」
千恵　「あ、…うん。いたよ？　いたよ私」
司郎　「なんで京都で学生やってたカップルは鳥取砂丘に行きたがるんだろうね。ディズニーランドみたいな聖地かよ」
千恵　「結局連れてってくれなかった癖にー」
司郎　「だから行ったんじゃん。京都のちー坊の下宿はまだそのままで、誰も住んでなくて、一応窓に小石投げてガラッと開かないかやって（石を投げる真似）…俺達新婚旅行いけなかったからさ、最初で最後の新婚旅行だったね」
　フラッシュ。千恵の下宿の前に一人たたずむ司郎。
千恵　「…」
司郎　「しかし、まだ折田さんがあの界隈で芝居やってたとはね」
千恵　「折田さん、ってあの、弓美さん？」
　フラッシュ。電柱にくくりつけられた芝居の告知ビラを見る司郎。
司郎　「あの再会は、ちー坊が引いたんだよね？　俺の力じゃ引けないわ」

○夜、J丘、銭湯の外～路上

　外で待っているほかほかの司郎。
　湯上りの千恵が出てくる。
二人　「（サイン出して）ビバ！　風呂！」
　歩く二人。
千恵　「で、弓美さんの芝居を見に行ったと。わざわざ京都までのこのこと」
司郎　「元々いた劇団は辞めて、独立して一人で台本書いたんだってさ。（真似をする）『暗い暗い川を、一人で下るようです。しかし私は、さかのぼる必要があったので

す』」
千恵　「…あの人の芝居、暗くて嫌い」
司郎　「でもちー坊より先に、俺はあの人に出会ってたんだ。ずっと憧れの人で…」
千恵　「知ってますう。付き合ってる時、何回舞台連れてかれたんでしたっけえ？」
司郎　「あ、呪い干しでしょ？」とげとげしくなってくる千恵。
千恵　「…何？」
司郎　「タンスに入れたものの答えって」
インサート。タンスからペアで干したパンツが出て来て、号泣する司郎。
部屋の壁には『折田弓美　一人芝居』のチラシが貼ってある。
司郎　「泣かせんなよ。誰にも言えないじゃん。パンツがペアで出て来て泣いたってさ。それこそ、折田さんにも」
千恵　「…」

○北村医院、院長室

千恵　「明日、京都に行こうと思います」
パソコンの画面に表示されている、劇団のホームページ。主宰・藤岡（３５）、女優折田弓美（３５）の写真。
北村　「無茶言うな。あいつによれば、君が死んでからはじめて再会するんだろう？」
千恵　「司郎は今夢の中で私と会ってると思いこんでる。憧れの人が夢に現れたら…」
北村　「会わせるのか！？」
千恵　「弓美さんが未来の鍵を握ってるの」
北村　「…時系列が、ぐちゃぐちゃになる」
千恵　「…医学的には、何か新しいことはわかった？」
北村　「いや、まだネットワークの…」
千恵　「彼女になら、私の死を司郎は話すかも」
北村　「順番が逆になるだろ。…たとえば、もし俺がやつより先に君に出会ってたら、君とつきあえてたか？　あの時こっぴどく

振られなかったか？」
千恵　「…昔の話はやめてください」
北村　「…」
千恵　「今のあなたは、夫の親友で、主治医だと思っています」
北村　「…」

○翌日、新幹線の中の千恵

○京都

○京都学生街、千恵の元下宿、前

小石を拾って、司郎がしたのと同じように、二階の窓に石を投げる真似をする。
千恵　「…」

○京都学生街、芝居の稽古場

ダンスの稽古中。
ジャージを着た劇団員の中に、弓美。
演出の藤岡は、新人女優の梨花（18）に、露骨に手足を触りながら、つきっきりで振付している。
藤岡　「一瞬、休憩いれよか」
汗を拭いている弓美の所へ、藤岡が。
馴れ馴れしく腰を抱こうとするのを弓美はかわす。
弓美　「もう少し、ばれないようにやったら？」
藤岡　「何が？」
弓美　「ただでさえ狭い人間関係。求心力がなくなるわよ」
汗を拭く梨花。劇団員と歓談中。
藤岡　「（とぼけて）何が？　お前がおるから、ここはまとまってるんや」
弓美　「台本。…いつあがるの？」
藤岡　「もうちょい待って。何も思いつかへへん。名女優が、白紙10ページ分アドリ

ブで持たせて」
弓美　「買い被らないで。…外の空気吸ってくる」

○同、外

千恵が待っている。ぺこりと一礼。
弓美　「風間…千恵さん？」
千恵　「ごめんなさい稽古中に。…学生の時に、何度か、風間に連れてこられました」
弓美　「…風間くんは、元気かしら？」
千恵　「…どう、説明したらいいか…」
弓美　「メールでの説明もよく分らないし、それでしばらく東京に来てくれ、宿は用意する、と言われても」
千恵　「…（司郎の真似を）『暗い暗い川を、一人で下るようです。しかし私は、さかのぼる必要があったのです』」
弓美　「…どうして知ってるの？　私が一人で書いてるものを」
そこへ、藤岡が煙草を吸いに出てくる。
弓美　「台本は、いつあがるの？」
藤岡、はさんだ煙草を抜き、残りの二本指を見せる。
弓美　「…（千恵に）二週間なら」
千恵　「…」

○二人のアパート

○二人の部屋

弓美が部屋に入ってくる。
司郎　「あれ？　折田さん！　夢の中に折田さんまでやってきた！」
弓美　「えっと…お邪魔、します」
司郎　「ようこそこの部屋へ！　いつも夢はこの部屋なんだ。ちー坊が生きてた時の、ちー坊の匂いのする部屋。あ、でも、ここに他の女の人が入るの嫌がる…（千恵に気づいて）よね？」

千恵　「べーつーにー」
　と、弓美を座らせる。
　台所に隠れ、モニタで北村が監視。
司郎　「あの、えっと、…あ、一人芝居、よかったよ」
弓美　「ありがとう。…私はまだ独立をこわがってるし、台本だってはじめて書くし、まだ完成もしてないんだけど」
司郎　「？」
弓美　「…ごめんなさい、こっちの話」
二人　「…（話のとっかかりがない）」
司郎　「（千恵に）ねえ、コバラスキーさんがロシアからいらっしゃってるよ」
　と、空席を指さす。
弓美　「？」
千恵　「えー、小腹がすいた、の擬人化表現といいますか」
弓美　「ふふ。コバラスキーさん。…ちょっと可愛いじゃない」
司郎　「！　ウケた！　ウケたよちー坊！」
千恵　「あれでしょ。どうせかっこつけて、こういう所見せてないんでしょ？」
弓美　「ことばひとつで日常を変えるのね」
司郎　「そうだよ！　そうなんだよ！　あ！　どうせ夢の中なんだしさ、遊園地行こうよ！」
弓美、千恵「は？」

○遊園地

　ジェットコースターに乗る司郎、弓美。
司郎　「ひゃっほーーーーーーーーうっ！」
弓美　「無理ーーーーーーーーーーーー！」
　北村、千恵は遠くのほうから、ビデオで記録しつつ、彼らの会話をイヤホンでモニタしている。
　ベンチで休憩する司郎、弓美。
司郎　「死んだ、…死んだ、僕の妻はね、実家が貧乏だからか、半額コーナーとか食べ放題とかに弱いのね。で、貧乏ゆえか、小

さい頃養子に出されそうになったらしいんだ」
千恵　「…（聞きながら）ちょっと、何言い出してんの」
司郎　「だからかな。『捨てられたもの』に異常に敏感なんだ。バザーや古本市ばっか行ったなあ。あいつは『役に立つから捨てないで』って声を、たくさん聞いてたんだ。なんでも拾ってゴミ屋敷は困るからさ、本当に好きなものだけにしなさい、って鍛えた（笑）　…あの部屋にあるものは、ほとんどがそうなんだ」
弓美　「…」
司郎　「俺もモテないからさ、生協の『誰でも持ってって下さい』コーナーにあるのを拾ってきた、ってよく言ってたよ」
弓美　「ふふ」
司郎　「彼女は、…だから、心が弱いのに、張りつめてた」
千恵　「…（司郎を見ている）」
司郎　「君の芝居は、そこが似てる」
弓美　「…」
司郎　「ごめん。こんな話面白い？」
弓美　「…その話、未来の私にしてあげて。…未来の私、喜ぶと思うわ」

○夜、Ｄのスーパー内

食材を買いに来た千恵、弓美。
司郎　「二人がそろうなんて夢みたいだよ。あ、夢か。夢の３Ｐイエーイ」
千恵　「いいから果物見て来なさい」
司郎　「ラジャー！　ブラジャー！」
果物コーナーへ消える司郎。
弓美　「…なんかごめんなさい。どこから切り出したものか」
千恵　「まだ初日だし、すんなり話せる精神状態とも思えない。あの人モテないから、美人の前だと緊張するし」
弓美　「そんな」

千恵　「あんなんですけど、やる時はやる男なんですよ」

○回想、京都の学生時代

京都の大学、正門前。学園祭前の各種の立て看板が乱立。
その中にひときわ大きな、未完成の白い看板。『上映会』の文字、映画看板風のかきかけの巨大画。
ペンキ職人よろしく、脚立に座る司郎（２１）。千恵（２４）が通りかかり、司郎の横顔をしばらく見ている。
千恵ＶＯ「あとで聞いたら、立て看つくる時間なくて、先に場所取りして現場で描きだしたって。毎日毎日描いてたなあ」
弓美ＶＯ「毎日」
千恵ＶＯ「最初は風間さん馬鹿だなあくらいに思うけど、気になるでしょ」
×　×　×
雨の日も、傘をさして描く司郎。
描く端から絵がにじむ。それをにじみ表現にしている。
缶コーヒーを二本置く千恵。
司郎　「黒川さん？」
千恵　「たまにはゼミにも来なよ」
千恵ＶＯ「なんか要領悪いんだよあいつ。間も悪いし」
×　×　×
カラオケ。ゼミの飲み会。
モニタに曲名「亜麻色の髪の乙女」が出ると、司郎と千恵がマイクを持って同時に立つ。
司郎　「（酔って）黒川さん俺が先」
千恵　「（酔って）風間さん私が先」
司郎　「オリジナル版！」
千恵　「島谷ひとみバージョン！」
譲らないまま前奏が終わる。
司郎　「（ムード歌謡調で）亜麻色の～」
千恵　「（ダンサブルに）長い！髪を！」

二人　「（それぞれの調子を譲らず）風がやさしく包むー」
　　そのミスマッチに爆笑するみんな。
　　二人は即興でセッション。
二人　「乙女は胸に白い花束を　羽のように丘を下りやさしい彼のもとへ　歌声が明るいのは恋をしてるから」
　　×　　×　　×
　　毎日毎日、看板を描き続ける司郎の前を通り過ぎる千恵。絵は徐々に完成してゆくとともに、二人が座って話すようになる。

○（元に戻り）スーパーP内

千恵　「司郎の良さは、わかるまで時間がかかるの。繊細で、頭の回転が速くて、ベルベットのような会話で。声がよくて、寝顔がかわいくて、いつも私を笑わせようとして…」
　　言いながらぽろぽろと涙が出てくる。
弓美　「千恵さん」
千恵　「…万が一の…万が一の場合、あなたに頼もうと思ってたの。でもできないよ。司郎の引き継ぎなんて嫌だよ。…ずっと二人で生きていくんだって思ってたのに。なんで司郎は私を捨てて未来へどんどん逃げてくの？　なんでその未来に私はいないの？」
弓美　「落ち着いて。大丈夫。…私にできることは…」
司郎　「この桃が熟れ熟れベスト3〜！」
　　と、桃を3つ持って現れる。
千恵　「（弓美に苦笑いして涙をぬぐう）ね？　間、悪いでしょ？」
　　司郎、千恵に桃を渡そうとして一個落とす。ぐしゃり、と床で潰れる桃。
司郎　「あああああ」
千恵　「…（カゴに入れる）しょうがない。時間は、巻き戻せないし」

と、手が止まる。
弓美　「…千恵さん？」
千恵　「あるよ。時間を巻き戻す方法！」
司郎　「？」
千恵　「逆行催眠だよ！」
司郎　「…逆行催眠って、あの、催眠術かけて時間をさかのぼっていったら、ＵＦＯにさらわれた記憶が！ってやつ？」
千恵　「そうそう。ずっとさかのぼって、０歳、-1歳、-2歳っていったら前世の記憶が！みたいなやつ！」

○催眠療法診療所、前

司郎　「…どうする？　俺ＵＦＯにさらわれたりしてたら」
千恵　「…そのＵＦＯを撃ち落とす」

○同、治療室

照明を暗くする催眠療法士。
ビデオをセットした北村。アロマキャンドルの炎、メトロノームのリズム。
深い椅子に身を沈め、目を閉じる司郎。

○同、待合室

喫煙所で煙草を吸う北村。座る弓美。
窓の外を見る千恵。
外で遊ぶ子供が、ヨーヨーを。何度もシュルルと巻き戻るヨーヨー。
突然、治療室から司郎の叫び声。

○同、治療室

司郎「もう嫌だ！　もう嫌だ！　もう嫌だ！」
催眠療法士が必死になだめている。
ドアを開けて入ってくる三人。
千恵　「（司郎に）大丈夫。大丈夫」

司郎　「なんでいなくなって気づくんだ！
あれが幸せか！　お前がいない人生なんて…ない！　ないよ！　自分の半分をもぎとられた…！！　ちー坊！　ちー坊！
ちー坊！　一生分君の名前を呼んでも、何も起こらない！」
北村　「なにが起こった？」
催眠療法士「拒否反応が、近づけば近づくほどはげしく…」
北村　「何に？」
催眠療法士「…（千恵をちらりと見て）奥様の、亡くなった日」
千恵　「…中止しましょう」
　司郎の背中をさする。
千恵　「…なんで気がつかなかったんだろう。もし今司郎が死んだら、私が気が狂う。それと同じ目にあわせるなんて。ごめんね司郎。ごめんね…」

○夕方、二人の部屋

　上半身裸で寝かされる司郎。ラベンダーオイルで、背中マッサージをしてやる千恵。
司郎　「あああ（と気持ちよさそうに）久しぶりだよう。ちー坊の按摩。ずっとなかったから体調狂うよう」
千恵　「おえーって感じがなんかたまってる。おえおえが列をなしてやってくるうう」
司郎　「ああああ（と気持ちよさそうに）」
千恵　「…さっきはごめんね」
司郎　「…いっぱい、リアルに出てきた」
千恵　「…」
司郎　「…なんでお前、京都に行ったの？」
　手が止まる千恵。
千恵　「どういうこと？　私は…京都で死んだの？」
　司郎はすやすや寝ている。
千恵　「…」

○後日、二人の部屋、台所

モニタの中では、部屋で司郎と弓美が談笑している。
台所には、籠城先のように、千恵の周りにカエルグッズ。ヘッドホンをつけ、大音量で音楽を聴く千恵（曲は「モルダウ」）。二人の話を聞きたくない。
風にレースのカーテンが揺れる。
感情が溢れてくる。
と、後ろから抱きしめる腕。司郎だ。
千恵　「しーちゃん」
司郎　「ちー坊の飼い方マニュアル。ちー坊が泣いている時は、その訳を聞いてはいけない。言葉に出来ない感情を、泣いて表現してるのだから。落ち着くまでうしろから優しく抱きしめて、こう言うの。…『たとえ世界中を敵に回しても、僕一人は君の味方だよ』」
千恵　「…」
司郎　「生きてる時は、ちゃんと出来なかった。…うまく出来たかな」
千恵　「（司郎の腕に抱かれ）…出来た」
風に揺れるカーテン。
音楽の調べに揺れる二人。
突然、強く吹いた風が、カエルの隣にいたガラスのウサギを倒して割ってしまう。
ウサギを悼もうとして、千恵は気づく。
千恵　「あっ！」
司郎　「どうしたの？」
千恵　「この病気は治るよ絶対！」
司郎　「？」
千恵　「だって未来の司郎は、この病気にかかってないじゃない！」
カエルの頭の先に、もうひとつカエルの頭を置くが、それをのける。
千恵　「未来でも未来に行ってる訳じゃないもん！　つまり、どうにかして、その方法は分らないけど、…いつかこれは治るの

よ！」
司郎　「？」
千恵　「あとは私が京都に行かなきゃいいだけなんだ！」

○夜、二人の部屋

二人でＴＶを見てると、
『世界のミステリー事件ファイル／ＣＡＳＥ９９　３日先から来た男』。
千恵　「しーちゃん！　引いた！　なんか似た病気のことかも！…」
再現ドラマとともにナレーション。
ＴＶナレ「東京都に住む会社員Ａさんに、ある日異変が！　『それは３日前にしたことだ』と突然妻に彼は言い始める。まさか、彼の脳が３日先にタイムスリップしたのか！？　宝くじの番号を当て、３日先の天気を当てはじめるＡさん」
千恵　「？」
彼の町、とＤ駅が。
彼の家、の映像はこのアパート。
実際の記録映像、として台所の場面
（顔はモザイク）。
ＴＶナレ「脳外科医で有名な、北村医師に話を聞こう」
ＴＶの中で笑顔で話す北村。
千恵　「どういうこと…！？」

○翌朝、アパートの前

玄関を出る千恵。
と、何人かがアパートを遠巻きに見ている。ケータイのカメラを隠す人間も。
千恵　「…」

○Ｄ駅前

同じくケータイカメラでテレビと同じアングルで写真撮る人々を目撃。

○北村医院、前

右には、不気味な黒服の男たちが病院前に立っている。
左には、工事業者が入っていて、巨大な機材を搬出中。
両者の間を抜けて千恵が乗り込む。

○同、空きフロア

エレベーターが開くと、がらんとした空きフロア。
機材の残りを作業員が搬出している。
とまどう千恵に気づく北村。

北村　「やあ。丁度工事中でね」
千恵　「どういうこと！？」
北村　「ウチのエースと機材がウリだったんだけどなあ…」
千恵　「昨日のＴＶ！　私たちを売ったの！？」
北村　「？　ああ、もう放送だったのか」
千恵　「家の周りにも駅にも人が来てる！　カメラにも撮られて！　あんなに晒されたら、司郎が元に戻っても元に戻れないじゃない！　動画まで公開するなんて！」
北村　「でもそのおかげか、グッドニュースだ。アメリカの研究所で、似た症例があったんだ」
千恵　「え？」
北村　「薬物療法とちょっとした手術で、クロニックデジャヴという症状が治まったそうだ。紹介状を書こう。滞在費、入院費手術費、俺が持つ。アメリカへ飛ぶんだ」
千恵　「は？」
北村　「運命は変わるんだよ。だってアメリカだよ？　あの駐車場で僕らが再会したのも、君流に言えば運命だったのかもね」
千恵　「…」
北村　「資金面はもつ。動画も公開しない。

ただ、ひとつだけ条件がある」
千恵　「…何？」
北村　「正直に言うと、まだ君が好きなんだ」
千恵　「…何を言ってるの？」
北村　「一晩だけでいい。君を俺にくれ。俺の人生の中で、唯一手に入らなかったものが君なんだ」
千恵　「私は、…司郎の妻です」
北村　「妻という役割に聞いてるんじゃない。千恵という一人の女に聞いている」
千恵　「…」
北村　「来週までに返事を」
エレベーターのボタンを押し、扉を開ける北村。乗り込む千恵。
憮然とした表情の千恵を残し閉まる扉。
ついたての向うから、黒服のスジ者、黒木（４５）が現れる。
北村　「表の黒服さんたち、下げてもらえないですかね。皆が怖がる」
黒木　「その為にやってんだよ。ケツに火がついてる癖に、まだ女を口説く余裕か」
北村　「予言者の件でだいぶ借金戻したんすけどねえ。本の印税待つより、テレビに動画売って、利子分のっけますよ」
黒木　「言った端から裏切んのかよ」
北村　「女は、やっちゃえば言うこと聞くもんですよ」
黒木　「フン。…胎児の臓器売ったときも、自分とこで勤めてる女自分で孕ませて、自分の病院でおろしてたな」
北村　「…結果、儲かったじゃないですか」
黒木　「今回は動画でマッチポンプか」
北村　「人聞きの悪い。回転している、と言いましょうよ」
笑顔を崩さない二人。

○二人の部屋、台所

千恵　「…」

籠城の時間を示すかのように、新しい鉢や本が周りに。
モニタの中では、部屋で司郎と弓美が談笑。
司郎　「じゃああの話は？　俺が予定より早く家に帰ったらさ、必ず『早く窓からお逃げになって！　主人が帰って来たわ！』『とうっ！　シュタタタタ』って寸劇。忍者の長兄と浮気してる設定で、実は天井裏にいるんだ。今も（と天井を指す）」
弓美　「なにそれ（笑）」
司郎　「俺が原稿書いてたらお茶持ってきてさ、『ああ！ごめんなさい。あなたの大事な原稿にお茶をこぼしてしまいました』『大丈夫さ』『私はダメな女ですう』『そんなことないさ』『えっ…』『愛してる』『そんな…』そして少女漫画のような花園へ…とか、二人で毎回やってたコント」
笑う弓美。

○街路樹の道

また捨てられた蘭を拾う千恵。

○二人の部屋、台所

籠城先にふえた蘭。千恵はヘッドホンで会話を聞いていない。
一方部屋では、
司郎　「ねえ。…膝枕してもらっていい？」
弓美　「はい？　…はい、どうぞ」
千恵　「（モニタを見てむかつく）」
司郎　「…ちがう」
弓美　「？」
おもむろに起き上がって、弓美にキスする。
千恵　「（動揺して、立って邪魔しようと）あわわあわわ！　ダメ！　…ダメ！」
弓美　「…ちがうって？」
司郎　「唇の形もちー坊とちがう。あの膝枕

も、あの唇も、…もうこの世にはないんだ」
弓美　「…（思わず司郎を抱きしめる）」
　千恵（言葉は音楽で聞こえていない）はショックを受け、外に飛び出す。
司郎　「ありがとう。どうしてちー坊は君に会ってる時に死んだんだろう」
弓美　「！！…千恵さん！！」
　しかし台所には千恵はいない。

○二人のアパート、外

　ケータイで電話する千恵。
千恵　「気が変わらないうちに、迎えに来てよ」

○夜、走るオープンカーの中

　助手席の千恵。
　豪華な花束が後部座席に。
北村　「気に入らなかった？　花束」
千恵　「私は司郎から花束もらったことないの」
北村　「蘭、多めに入れてみたんだけど」
千恵　「…お酒のみたい」

○夜、北村の高級マンション前～北村の部屋

　酔ったような映像。不安定で、焦点もあわず、ゆがんだ画。
　バーで酒をあおる千恵。
　タクシーから、泥酔する千恵を降ろす北村（くわえ煙草）。見張りの黒服たちと目が合う。
　部屋に入るなり千恵の唇を奪う北村。
千恵　「（泥酔）私のどこが好きだったの？」
北村　「心が弱いのに、はりつめてる所」
千恵　「ふふふ（北村のメガネを外す）」
　胸を揉まれ、あえぐ千恵。

床に落ちる花束。
机の上の灰皿に、火のついた煙草を置く北村。
机の上のパソコンは、司郎のビデオ記録（遊園地の場面）をキャプチャ中。
朦朧とした意識の中、千恵、ふと気づく。両足が大きく開かれている。
北村が上に被さり、挿入せんとするところ。
千恵　「懐かしい」
北村　「…（勢いが止まる）」
千恵　「（北村をなで）でもなんかちがう」
（以下、ゆっくりと、酔った映像は戻っていく）
千恵　「あ。…大丈夫。つづきを」
北村　「…（あせる）…（あせればあせるほど上手くいかない）」
千恵　「大丈夫。大丈夫だから」
北村　「……シャワーを、浴びてくる」
ベッドを立ち、シャワールームへ。
千恵はシーツをまとい起き上がる。
パソコンにうつる遊園地の場面。

○同、マンションの外

黒木がやってくる。
黒服たち「ウス」
黒木　「今日の所は動きはねえだろうが…」
高層階の部屋を見上げる。

○同、北村の部屋

シャワーを浴びる北村。
（以下、ベッド脇の千恵との会話）
千恵　「さっきの口説きは、オリジナル？」
北村　「何が？」
千恵　「弱いのに、はりつめてるって、…グッと来たんだけど」
北村　「…（ニヤリと笑う）そうだよ」
ビデオの中の司郎「心が弱いのに、張りつめ

てた」
千恵　「…」
千恵、「風間司郎」のフォルダを開けようとするが『パスワードを英数字で入力して下さい』とはねられる。
shirou、kazamaなど入れるも無理。
千恵　「ＵＳＡ」のフォルダも同じく。
北村　「学生時代の司郎はどんなだった？」
「実際、あいつ大学に来ずに映画ばっか撮ってたからさ、俺があいつを知ったのは三回生なんだ。でも気が合うんだろうな。何回も家に泊めた仲だよ」
千恵　movie、best firendを入れても無理。
『パスワードを英数字で入力して下さい』の文字。
「英語…数字…」
ためしにテンキーで数字を入力。
（この時点ではその数字は見せない）
『受け付けました』の文字。
千恵　「……！！」
各放送局別に、司郎の動画が整理されている。「ＵＳＡ」には「逃亡先」が。
小さなハードディスクを見つけた千恵は、接続して、全コピー。
北村が、シャワー室から出てくる。
メガネをかけようとする北村に、
千恵　「メガネないほうがいい男よ」
北村　「言うね」
とメガネを脇に置く。
千恵　「…ねえ、アメリカのどこに、私たちは行くの？」
北村　「…コロラド州。…ラボは…、そうだ、シュワルツラボだ。患者は、スティーヴン、スティーヴン・ベルイマン」
その微妙なニュアンスを聞きとった千恵は、北村の視線の逆を見る。
そこには本棚の専門書。それを見た千恵は確信する。
千恵　「…司郎はアメリカで治ると思う？」
北村　「勿論だよ。スティーヴンの症例が救

い手だ。親友を助ける。コロラドに向かってハッピーエンドだ」
千恵　「…逃亡先のファイルには、ニューヨークの住所があるんだけど」
北村　「？」
千恵　「パスワードは、オー４つのひとみがニッコニコ。どういう意味？」
　パスワード入力画面。宝くじの場面。
　０４１３２５２５。
　北村、表情が変わる。
千恵　「あのセリフだって、司郎が言った言葉を借りただけ。さっきあなたは本棚を見なかった。そこにシュワルツやベルイマンって書いてあるから」
　本棚の著者名などにその言葉が。
北村　「…何を言い出すんだ」
千恵　「つくり話なんでしょ？」
　ピロンとコピー終了の音。
　北村、それを聞いてあわててメガネをかける。クリアになった視界は、ハードディスクを引き抜く千恵をとらえる。
北村　「全部見たのか！？」
　千恵、椅子に乗り、灰皿の火のついた煙草を取り、スプリンクラーに近づける。その下にパソコン、ひるむ北村。
北村　「俺は、親友を助けたいんだ！　あいつは治る！　医者の俺が言うんだ！」
千恵　「…」
北村　「説明させてくれ。…まずその格好を」
　シーツ一枚の格好にあらためて気づく千恵。はらりと胸元がはだけている。それを直そうとした隙をついて、北村はハードディスクを奪おうとする。とっさによける千恵。
北村　「…」
　千恵、煙草をスプリンクラーに押しつけようと。
北村　「いい子だから返せよ！　それは金になるんだ！　表の連中を見ただろ！　病院

の前にもいた奴らだ！　あいつらに金を返さないと俺がヤバイんだよ！」
千恵　「どこまでが本当なのよ！」
北村　「お前を好きなのも本当だよ！」
と一歩前に出る。その足が、床に落ちた花束をぐしゃりと踏む。
千恵　「…ひどい」
北村　「？　（潰した花を見て）ごめん」
千恵　「ちがう。花束が、私にとってはひどいことなの。司郎が私に花束を贈らないのは、私が植物は鉢植えしか認めないから。花は生きて大地に根を張るの。それは、死体の生首をあつめただけだわ」
北村　「…きみが好きだ。あいつは治る。動画は売らない」
千恵　「もうひとつ、司郎なら知ってる。私、煙草嫌いなの」
火をスプリンクラーに押しつける。
ベルが鳴り、部屋中に雨が降る。
煙と火花を吹くパソコン。
雨からハードディスクをかばった千恵、かばんを取り玄関を飛び出す。
北村　「返せ！」

○深夜、北村の高級マンション、外

ずぶ濡れでシーツ一枚の千恵が走って逃げていく。驚く黒木たち。
北村　「（黒木に）あそこに全データが！」
ずぶ濡れでフルチンで出てくる北村。
黒木　「なにをやってんだお前！！」

○深夜の住宅街

シーツ一枚で逃げる千恵。
追う黒木ら黒服。
支払い中のタクシーに飛び乗る千恵。
客のサラリーマンを押しのける。
千恵　「早く出して！　お金は払うから！」
黒木、石を拾い投げる。リアウインド

ウにひびが。
千恵　驚く運転手はブレーキを踏む。
　「はやく！」
黒木　黒木、懐から銃を出し、リヤタイヤに一発撃つ。
　だが、発進が間に合い外れる。
千恵　「ちっ」
　撃とうとする姿を千恵は見る。
黒木　「（伏せて）止まっちゃダメ！」
　角を曲がるタクシー。住宅街に車は来ない。走って追いかける黒服。
黒木　「女の家をおさえろ！」

○同、走るタクシーの中

　割れたリアウインドウ。
　震えながらケータイをかける千恵。
千恵　「しーちゃん！　いますぐ服と財布持って東京駅に集合！」
　たたき起された寝室の司郎。
司郎　「なに？　…どこいくの？」
千恵　「（必死で考える）…鳥取砂丘！」

○同、北村の部屋

　水浸しの部屋には誰もいない。
黒木　「…あの糞野郎…どさくさにまぎれて！」

○夜行列車の中、夜明け

　窓から夜明けが見える。
　千恵は眠る司郎を見ている。朝の光に目を開ける司郎。
千恵　「おはようしーちゃん」
司郎　「おはようちー坊」
千恵　「…」
司郎　「？」
千恵　「（三つ指ついてあやまる）すいませんでした！　あやうく恋愛の神様を裏切る

ところでした！」
司郎　「？」
千恵　「でもしーちゃんも弓美さんにチュー
したわけだから、イーブンってことで！」
司郎　「…何で夢の中で折田さんにチューし
たの知ってるの？」
千恵　「べ、別に。で、どうだったのよその
後は！？」
司郎　「…どうって、それで終了。違和感だ
けが気まずくて」
千恵　「違和感？」
司郎　「なんかちー坊と違うって」
千恵　「…言ったの？」
司郎　「言った」
千恵　「…ふふふ。あはは。あははは。恋
愛の神様はちゃんといるのね。結果的…」
二人　「結果的一穴主義者」

○鳥取砂丘

青い空。
目の前に広がる、巨大な白い砂の丘。
千恵　「来ーーーたーーーーーーーーー！
と、つ、と、り…砂ー丘ーーーーーーー！
しーちゃんと、しーちゃんと…つーいー
にー来ーーーーーたーーーーーーーーー！」
とテンションＭＡＸで走っていく。
ラクダに乗る二人。
千恵　「動物くさーーーーーーーーー！」
砂丘に登りはじめる二人。
千恵　「あつーーーーーい！　思ったより
砂丘ちっさーーーーーーーーい！」
司郎　「昔言ったじゃん。言うほどたいした
ことないって」
千恵　「でもリアルなの！　しーちゃんと来
ることが私の一生の大事だったの！　ずっ
とずっと来たかったの！！」
息を切らせながら丘の頂上へ。
砂の世界は一転、海が見える。
千恵　「トップ・オブ・ザ・ワール

ドーーーーーーーーーーーーーーーー！」
二人は頂上で座ってひと休み。
風の心地よさに、息も落ち着く。
司郎　「…なんで京都のカップルはここを目指すのかねえ」
千恵　「好きな人と、世界で二人きりになりたいからに決まってるじゃない」
司郎　「…」
千恵　「この世界で出会った好きな人を、運命だと思いたいの。（掌についた砂を見せ）この砂粒が隣り合ったのも、偶然じゃなくて運命」
司郎　「…偶然だよ」
千恵　「…運命」
手を握る千恵。
海からの風が、千恵の髪をなびかせる。
司郎　「（口ずさむ）亜麻色の　長い髪を　風がやさしく　包む」
千恵　「（つづけて）乙女は　胸に白い　花束を」
二人、同時に立つ。
カラオケの時のように。
二人で「羽のように丘を下り　やさしい彼のもとへ　歌声が明るいのは」
司郎　「…（千恵を見つめる）」
千恵　「（微笑む）恋をしてるから」
二人で「薔薇色の微笑み　青い空　幸せな二人は寄り添う」
千恵、指示。司郎、意図を察し、丘を海へとおりてゆく。
千恵　「亜麻色の　長い髪を　風がやさしく包む」
千恵、両手を広げ、風を精一杯うけて丘を駈け下りてゆく。
千恵　「乙女は！　羽のようにー！　丘を下るーーっ！　彼の　もとへーーーっ！」
司郎、下で千恵を抱きとめる。
全力で抱きつく千恵。

○砂丘の夕日、二人はやさしいキスを

○夜、砂丘に花火があがる

○同、ホテルの部屋

挿入する体勢に。

司郎　「懐かしい」

千恵　「…懐かしい」

司郎　「しっくりくる（微笑む）」

千恵　「…しっくりくる（微笑む）」

窓から入る花火の明かりが、暗闇に二人の肉体を浮かび上がらせる。

二人は愛を確かめ合う。

暗転。

○翌朝、白いベッドの中

朝の光で目を開ける千恵。

目を開ける司郎。

司郎　「おはようちー坊」

司郎は千恵のほおをなでる。

千恵　「おはようしーちゃん」

額をこすりつけ、甘える千恵。

千恵　「ねえ。…四足歩行のサルが、どうして二足歩行になったか知ってる？」

司郎　「何回もちー坊から聞いたよそれ」

千恵　「サルは木の上で生きてる時は、四足歩行だったの。ある日メスザルが、おいしい果物が沢山なってるのを見つけた。家で待ってるオスザルのために、出来るだけ持って帰ろうと両手いっぱいに抱えて、思わず二本の足でトトトトーって歩いたの。これが人類初の二足歩行」

司郎　「誰もその瞬間見てないだろ（笑）」

千恵　「でも、私の一番好きな話」

司郎　「俺だったらぽろっと一個落としそう」

千恵　「（笑）」

司郎　「…もうちょっと寝ていい？」

千恵、やさしくキスをする。

○朝、一人海岸を散歩する千恵

○二人の部屋とカットバック

蘭に水やりをしながら、ケータイで話す弓美（以下千恵とカットバック）。

弓美　「殺されそうだったって…！」

千恵　「しばらく、雲隠れします。あ、水やり助かりました。京都に帰って、巻き込まれないようにしてください。宿の支払いとかは済ませておきますので」

一枚の名刺を弓美は見ている。

弓美　「名刺、もらったの」

×　×　×

二人のアパートに来る弓美。

黒木が張っている。名刺を出す。

弓美　「…何か？」

黒木　「北村医師を探しているんですがね」

×　×　×

千恵　「そんな名刺、今すぐ捨てて。関わり合いを避けましょう。では、ケータイとかも解約しますので」

弓美　「…これからどうするの」

千恵　「本物の予言者とか超能力者とか、地道に探してみます。予知能力に悩まされたけど突然治っちゃった人とか。未来の司郎の意識が憑依してるとしたら、お祓い師とか」

○ホテルの部屋

千恵　「司郎ーそろそろごはん食べようよ」

司郎は寝ている。

千恵　「しーちゃん？　司郎？…」

ゆすっても叩いても、司郎は起きない。

千恵　「司郎！」

○村井の自宅

オフの日の医師、村井。
ホテルの千恵と電話で話す。
村井　「脈拍や呼吸その他が安定していると
すると、昏睡状態かも知れません」
千恵　「…植物状態、ってことですか？」
村井　「一刻も早く付近の医者へ」
村井の受話器を奪う手。その主は…
北村　「そこは、どこだ？　ウチのエースを
回診に行かせようか？」
千恵　「…そこが、新たな逃亡先ね」
北村　「未来を変える方法がひとつだけある。
取引をしよう。知りたくないか？」
千恵　「…取引？」
北村　「例のものを返してくれ。映像は、あ
いつと分らないよう加工する」
千恵　「…未来を変える方法って？」
北村　「簡単だよ。折田弓美を殺すのさ」
千恵　「は？」
北村　「あいつが弓美に再会する未来が消滅
する。未来が分岐して、君が死なない、め
でたしめでたし」
千恵　「ほんとうにそうなる？　…司郎がそ
れで元に戻る？」

○ホテルの部屋

目覚める司郎。
司郎　「あれ？　…ちー坊！　ちー坊じゃな
いかい」
千恵　「しーちゃん！」
電話を切る千恵。
千恵　「よかった！」
ベッドの上に起き上がる司郎。しかし、
その速度が遅い。
隣に座る千恵。膝枕で甘える司郎。
司郎　「…まだ夢に来てくれるんだね。…
ちー坊は、死んだときのまま、歳を取らな
いね」
千恵　「（嫌な予感）」
司郎　「ああこの固くて痛い膝枕。これが

ちー坊の膝枕だよ…」
千恵　「司郎は…いまいくつなの？」
司郎　「君の…倍以上、生きたよ」
千恵　「…」
司郎　「８０をこえた」
千恵　「…先に、そっちが来ちゃうの？…
　私の所へは、もう戻って来ないの…？」

○夜、村井の自宅

　電話を取る北村。
千恵　「人殺しのビデオは、高く売れる
　よね？」
北村　「…いい返事だ」
千恵　「撮りにきなさいよ」
北村　「彼女は芝居の公演に入った。千秋楽
　の後、劇場で会おうじゃないか。場所は京
　都だ」
千恵　「…京都」
北村　「どうした？」
千恵　「……わかった」

○夜、海岸

　ケータイで電話する千恵。
　稽古場の弓美とカットバック。
弓美　「無茶よ！　私と会ってる時にあなた
　は死んだって司郎さんが言ったのよ！　し
　かも京都って！　来ちゃダメよ！」
千恵　「今回がそれだと決まった訳じゃない。
　司郎が治るのが運命なんだとしたら、私
　だって頑張らなくちゃ。北村を野放しのま
　まには出来ない。司郎が治った時に、何事
　もなかったように元の暮らしに戻れない
　と」
　暗い海を見つめる千恵。
　インサート。割れたガラスのウサギ。
千恵　「あの名刺、まだ捨ててないよね？」
弓美　「千恵さん」
千恵　「…私は死ねない。まだまだたくさん、

司郎に果物をもって帰らなきゃ」

○朝、ホテルの部屋

ベッドでよく眠る司郎。
テーブルの上にメモを書き残した千恵。
子供のような寝顔にキスをする。

○雨が降る京都

○特急の中の千恵、雨が窓を叩く

○新幹線の中の北村、雨が窓を叩く

○京都の小劇場、雨、「本日千秋楽」の看板

○新京極の商店街、刃物屋で出刃を買う千恵

○劇場の外、傘をさした北村が到着

○舞台上の弓美の熱演

○小劇場の手前、雨

黒木と黒服たちが、待っている。
黒いバンが停めてある。
千恵、黒木たちと視線を交わす。

○小劇場の前庭、雨

バン、と扉がひらき、客が帰ってゆく。
劇団員達が見送る。
人の流れに逆らって、千恵がやってくる。客足を邪魔しないように、脇へ。
人の流れを挟んで、北村と対峙する。

千恵　「…」

北村、ビデオカメラを出す。

北村　「牢屋からは、金をつんで出してやる」

千恵、ハードディスクを見せ、出刃包

丁を出す。
北村、醜く笑い、録画をはじめる。
背後で見張る黒木たちに、気づいていない。
客が全てはけて、劇団員達が扉をしめようと。
体の後ろに出刃を隠し、最後尾の弓美に千恵が声をかける。
千恵　「弓美さん」
立ち止まり、振り返る弓美。
ドーンと、重い扉がしまる。
弓美　「来るなら言ってくれれば」
北村はファインダーを凝視。
北村　「（独り言）いいぞ。…ひきつけろ。…もっと近くだ」
千恵は傘を捨て、出刃を出す。
北村　「（独り言）バカ！　早い！」
千恵　「あなたなんかいなければ良かった」
弓美　「…それは、芝居用の小道具じゃないわよね？」
千恵、自分の左腕を軽く引き、血を流す。雨と血が混じり合う。
そこへ、撤収中の梨花が登場。
梨花　「ちょっと…何やってんの！？」
千恵、驚く。弓美、梨花に、
弓美　「落ち着いて。痴情のもつれよ」
梨花　「…警察！　警察、呼ばな！」
ひるむ千恵、弓美。計画が違う。
千恵は決心し、弓美に体当たりする。
梨花　「危ない！」
梨花は弓美をつきとばす。転ぶ弓美。
梨花の腕に出刃が当たり、流血。
梨花　「誰か！　誰か！！」
扉を開け、藤岡他劇団員たちが。
藤岡は思わず、血を流す梨花の元へ。
弓美は苦笑して、ふっきれる。
弓美　「…決着をつけましょうよ！」
千恵　「…」
千恵は弓美に馬乗りに。
抵抗する弓美の手を振り払い、振りか

ぶって胸を一突き！…しかし、北村の
角度からはよく見えない。
北村　「見えない！…」
ファインダーから顔を上げた瞬間。
黒服たちが両脇を固め、北村を拘束。
北村　「なんだよ！！　離せっ…！」
千恵　「（顔を上げ、北村に微笑む）」
包丁は刺していなかった。
黒木　「（拍手）いい芝居だった」
北村　「…だましたな！　だましたのか！」
黒木　「本気で刺すのかと思ったよ」
千恵　「…本気で刺したらどうなるか、
ちょっと考えちゃったけど」
暴れる北村。腕力では勝てない。
千恵　「…（弓美に）いい台本だったわ」
弓美　「はじめて最後まで書いたわよ。（梨
花を見て）計画にない闖入者がいたけど」
千恵　「人生は、アドリブだから（笑う）」
弓美の手を引く千恵。
ぽかんとする梨花、藤岡他劇団員。
黒いバンに、北村は押し込まれる。
北村　「…千恵！」
振り返る千恵。
北村　「…なんで俺じゃダメだったんだ？
エリートコース、テレビにも出てる、いい
クルマにいいマンション、何が問題だ？」
千恵　「私は、司郎とだったらホームレス
だって一緒にやる自信がある。…あなたは
昔から外側の話ばかり。中身の話がない」
北村　「中身ね。ははは。…中身は、どこで
売ってるんだろうね（自虐的に笑う）」
千恵　「たとえあなたに先に出会っても、私
は司郎と付き合う運命だったと思う。世界
中を敵に回しても、私はたった一人の彼の
味方。果物を持って帰る、二足歩行のサル
になるの。私は、…風間司郎の妻です」
かばんからハードディスクを出す。
千恵　「割れるものは、大事にしないとね」
と落とす。地面で、パーンとひびが。
北村、制止を振り切り、ハードディス

クを奪おうと。が、手がすべり、ハードディスクは車道に飛び出す。

千恵　「！」

咄嗟に拾おうと…

弓美の悲鳴。

迫る車。

車、咄嗟にハンドルを切る。

そのタイヤがハードディスクを踏み、粉々にする。濡れた路面で大きく滑るその車。横転。

それを避けた別の車が、急ハンドルを切り…

ドン、という重たい音。

宙に舞う千恵の体。

再び捕えられる北村。

粉々になったハードディスク。

確認して、微笑む千恵。

暗転。

○ホテルの部屋

ケータイの着信音がずっと鳴っている。

司郎、起きる。

机の上の走り書き。

『蘭をたのむ』と。

司郎　「ああ。…あの日だ…ここはあの日だ…。この電話に出たら駄目だ…あの報せが来るんだ…」

ケータイは鳴り続けている。

ついにケータイを取る司郎。

電話の声「川端警察ですが。落ち着いて聞いて下さい。奥様が、事故に…」

司郎　「うわあああああああああああ！」

と倒れ込む。

○イメージ、坂の下

坂の上で、千恵が手を振っている。

坂の下の司郎。額から、毛糸のようなものがのびている。糸の先には、老人

がいて（シルエットで顔は分らない）。
その額につながっている。
老人は微笑み、ハサミで切る真似を。
と、二人をつなぐ糸は切れ、消える。
司郎に手を振り、坂の上に向かう老人。
坂の上で手を振る千恵。
司郎はあたりを見回す。

○再び、ホテルの部屋

電話の声「もしもし！　もしもし！」
倒れていた司郎、目を開ける。
電話の声「大丈夫ですか！　お気を確かに」
司郎　「あ…はい（意識が定まらない）」
電話の声「奥様が事故にあわれました。搬送先の病院は…」
司郎　「…（慌てて起き上がる）はい？」

○病院、手術室に向かう廊下

千恵を乗せたストレッチャー。

○病院内、主治医の説明を受ける司郎

主治医「術式中に命を落とす危険もあることを御承知下さい。ここに判子を」
司郎　「責任逃れしてんじゃねえよ！　いいからはやく！」
暗転。

○一週間後、深夜、ＩＣＵ

人工呼吸器の、規則的な機械音。
沢山のチューブにつながれた千恵の体。
まぶたをテープで止められている。
やつれた司郎は、今日も話しかける。
司郎　「ちー坊。はやくウチに帰ろうよお。いつまで寝てんだよ。もう一週間だよ？
涙出なくなって目乾くからってテープ貼られちゃったじゃねえか。ここはふっと目を

開けて、『どれくらい寝ていた？』『馬鹿野郎心配させやがって！』『しーちゃん！』『ちー坊！』ヒシッブチューすぱーんすぱーんすぱーん『看護婦さん来ちゃうううう』の流れの所だろうが」
窓の外は、雨が降りはじめる。
司郎　「（窓の外を見て）嫌だなあ…雨だよ…気圧が下がってさ…」
隣に、千恵が座る（肉体はチューブでつながれているので、これは千恵の魂である）。微笑む千恵の魂。
心拍数のメーターが、０になったり１００になったりする。
司郎　「ちー坊！　ちー坊！　看護婦さん呼んでくる！」
走ってゆく司郎。心拍数は０に。
魂の千恵は、自分の体を見ている。

○後日、二人の部屋

布団の中で目を開ける司郎。
司郎　「…おはようちー坊」
頬を触ろうと手を伸ばす司郎。
その指の先には、千恵の遺影。
骨壷と祭壇。
司郎　「…」
起き上がり、窓を開ける。
ふすまを開けても誰もいない。
部屋の隅に座り、動かない司郎。
夕になり、夜になり、夜明けになる。
（以前のシーンと同じである）
動かない司郎。
千恵の遺影を見ている。

○街路樹の道

一人歩く司郎。独り言をつぶやく。
司郎　「うん。そう。いつもこの道を、きみと話して歩いてたから。…きみがいないと、何話していいかわからない」

通行人は、つぶやく司郎を奇異の目で見る。
通りの反対側の木の陰から、千恵の魂が見ている。司郎と一緒に歩く。
司郎　「四十九日までは、魂はその辺をフラフラしてるんだって。だから、お前、まだいるよね」
司郎が反対方向に視線をふるので、あわてて逆側に行く千恵。
手帳を出し、見る司郎。一カ月近く白紙である。
司郎　「俺さ、ショックすぎるのかな。ここ一カ月ぐらいの記憶がないんだ。撮影すっぽかしそうになった所までは、なんとなく覚えてるんだけどさ…」
千恵、驚いて手帳と司郎を交互に見る。
司郎　「ねえ。京都に行こうよ。ついでに鳥取砂丘まで行こうぜ。…新婚旅行に行こうよ」

○鳥取砂丘、夕

砂丘の上で、千恵の遺影と夕日を見る司郎。千恵の魂は、隣に座る。

○京都、鴨川沿い

号泣しながら自転車で爆走する司郎。
籠の前に千恵の遺影。
千恵の魂は、後ろに乗っている。

○京都、千恵の元下宿の前

千恵の魂が隣に。
司郎　「電話代がもったいなくて、窓が開くのを待ってた。知ってる？　こっから、君が動いてるのが見えたんだ」
司郎、石を拾う。
千恵　「…言ってよね。そういう、細かい所も。少しでも、しーちゃんが私を好きだっ

て、私は知りたいのに」
司郎には聞こえていない。
石を投げる司郎。窓に当たった石は跳ね返り、千恵のところへ飛んでくる。
千恵が思わずよけると、石は、後ろにあった電柱にくくりつけられた芝居の告知に当たる。
司郎　「ん？　…ああ！　まだこの界隈に残ってたんだ！」
『折田弓美　独立第一弾　一人芝居』
司郎　「ちー坊、お前、いるね？　こんなの引けるの、お前だよね？」
苦笑いする千恵。
司郎　「ねえ。…君の夢を、見たよ」
千恵　「…」
司郎　「台所でさ、君が生きてて俺が超びっくりすんの。『生きてたのか！』って。で、思わずマグカップ割っちった」
千恵　「…（驚く）」
司郎　「でさ、踊り場で踊ったんだ。あれから結局、一回も踊ってなかったじゃん。こう…こんな感じで…」
一人で、ぎこちないダンスを踊る司郎。
千恵は、涙が出てくる。
千恵　「わかったよ。全部わかったよしー ちゃん」
司郎　「次に見た夢はさ、ふすま開けたら君と北村がいてびっくりした」
千恵は淑女のようにダンスの挨拶をし、司郎の腕の中に入る。
千恵　「逆だったんだ。全部逆だったんだ。…司郎の能力は、未来に行くんじゃなくて、夢の中で過去に戻るタイムスリップ」

○イメージ、二人の部屋

一人寂しく取り残される千恵。
机の上のウサギとカエルを眺めている。
倒れたウサギよりはるか遠くに、カエルの頭。それを取り、生きていた頃の

ウサギの隣にいる元の胴体に戻す。

千恵　「…」

部屋の奥の光差す所から司郎が現れ、千恵の向かいの席に座る。

たくさん持ってきたカエルの人形を、倒れたウサギのそばに一列に並べる。

千恵　「？」

司郎は微笑み、倒れたウサギの一番そばのカエルを、生きていた頃のウサギの隣へ。

押し出された形で、元いたカエルはウサギの後ろ側、つまり過去に置かれる。

×　×　×

司郎　序盤のフラッシュ。

司郎　「？　撮影は3日前にやったじゃん」

司郎　「これ3日くらい前の録画でしょ？」

司郎　「だから俺は今、過去にいるんだよ」

×　×　×

新しくウサギの隣に来たカエルの人形は、笑った顔だ。

×　×　×

司郎　フラッシュ。

「よかった！！　生きてたあああ！」

×　×　×

千恵　「つまり…未来の司郎が、過去に来てたってこと？」

司郎は、（未来の）倒れたウサギのそばから順番に、カエル達を（過去の）生きていた頃のウサギの周りに移動させる。

×　×　×

フラッシュ。ふすまを開ける司郎。

司郎　「ちー坊！　生きてたのか！」

膝枕に甘える司郎。

×　×　×

千恵　「ねえ。言いなさいよ。何の為に？」

真意の分った千恵は、司郎の顔を見る。

司郎はほほえむ。

司郎　「何度でも、何度でも」

千恵　「何度でも何度でも…？」
　生きていた頃のウサギの周りは、未来から来たカエル達でいっぱいになる。
司郎　「きみのところへ帰る」
　涙でくしゃくしゃになる千恵。

○今までの場面が走馬灯のように

　ランチアンド映画、パスタ屋の砂漠の写真、ビバ風呂。弓美が部屋に来た日。うしろから抱きしめる。夜行列車、鳥取砂丘、二足歩行のサルの話をした朝。ホテルでした膝枕。

○千恵の元下宿の前

　涙が止まらない千恵。
千恵　「私の方からつきあってって言ったじゃない？　…ずっとずっと不安だったの。私がただ一方的に司郎を好きなんじゃないかって。私の持ってくる果物は迷惑なんじゃないかって。…ぜんぜんそうじゃなかったんじゃん。…司郎は、私に会いたかったんじゃん」
　お互いに見えない、聞こえないのに、二人の踊りの呼吸はぴたりと合っている。
司郎　「夢で会えてよかった」
千恵　「これから、何度でも何度でも、夢で会えるよ？」
司郎　「君に会えてよかった」
千恵　「これから、帰って来る時は電話ぐらいしてよね？」
司郎　「…」
千恵　「？」
司郎　「うん。わかった」
　千恵の声が聞こえたのか、それは司郎にしかわからない。
　握れない手を握る千恵。抱けない肩を抱く司郎。さわれない胸に顔をうずめ

る千恵。
二人のぎこちない踊り。
それは永遠のダンス。
千恵は、司郎にキスをする。
暗転。

○数年後、二人の部屋

光の差す部屋。
ガラリと扉をあけ、弓美が。
弓美　「…お邪魔、します」
司郎　「ようこそこの部屋へ。…あ、でも、あいつが女の人が入るのを嫌がるかな」
弓美は、少し距離をおいて座る。
司郎は、ピンクの花の咲いたマグの蘭を手に、霧を吹いている。
司郎　「ずっと謎だったんだ。なんで胡蝶蘭なのかって。蘭の女王っつったらカトレアだし、デンドロとか初心者向けの蘭だっていっぱいあるし。…沢山拾ったって偶然もあるけど、あいつが胡蝶蘭にこだわったのには意味があったと思うんだ」
弓美　「…」
司郎　「答えはね、多分花言葉だよ。あいつ絶対知ってたね」
はじめてカメラが窓側をうつす。
窓一面の蘭たちが、ピンクの花で満開。
司郎　「胡蝶蘭の花言葉は、…『あなたを愛します』」
部屋一杯に、無数に咲くピンクの花。
千恵がこつこつ救ってきた、部屋中の胡蝶蘭の満開の花。
光あふれる窓際の真ん中に、マグの蘭を置く司郎。
司郎　「俺絶対、何度でも何度でも…何度でも、咲かせる」
大きな窓の、古い六畳ふた間。
どの花にもどの花にも、千恵のことばが咲いている。

（了）約１１６分